HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	自己卑下発話によるフェイスバランス調整のストラテジー
Author(s)	隋, 暁静
Citation	国語国文研究, 153, 94(1)-81(14)
Issue Date	2019-08-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89718
Type	journal article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_153_94(01)-81(14).pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

自己卑下発話による
フェイスバランス調整のストラテジー

隋　　暁　静

1．はじめに

日常会話で、われわれはよく何らかについての評価を行う。それらの評価には、話し手があえて自分、あるいは自分側に属するモノ／コト／ヒトに関して、否定的に言語化する例も少なくない。このように、話し手が自分自身に対して否定的評価を行う言語行動を本稿では「自己卑下」と呼ぶことにする。例えば、初対面の自己紹介などの挨拶としてよく使われる定型表現とも言える（1）（2）のような用例もあれば、（3）（4）のように褒めに対する自己卑下や自己卑下に対する自己卑下というやりとりもよく見られる[1]。

（1）まだまだ分からないことがいっぱいあると思いますが、これからどうぞよろしくお願いいたします。
（2）【学会などの司会者の初めの挨拶】不慣れなので間違えるかもしれませんが、よろしくお願いします。
（3）A：B さん、英語上手ですね。
　　B：いえいえ、全然だめですよ。
（4）A：わたし、英語全然だめです。
　　B：わたしも苦手です。

永野（2017）は会話分析の視点から、「褒めと自己卑下の連鎖は非常に複雑に互いを共起し合っており、これら２つの発話行為は連鎖として現れやすい」と指摘しているが、その「互いを共起し合う」「力」となる要因も考えなければならないと思われる。そこで、なぜ褒めと自己卑下がお互いに誘発したりされたりすることがしばしばあるのかについて、本稿ではフェイスバランスという考え方を用いて検討したい。

すなわち、ここで、（1）と（2）における自分自身のことを低く評価する自己卑下発

[1] 本稿では、分析の便宜上、特に説明しない限り、話し手は「自己卑下発話を行う」側で、聞き手は「自己卑下発話を受ける」側を指す。そして、話し手の自己卑下の部分は下線で示す。

話の使用は、場面制約によるものであるとすれば、(3) と (4) における B の自己卑下発話は会話参加者間におけるフェイスバランスによるものではないかと思われる。

2．先行研究

Kim (2014) は、日本語母語話者同士の会話において、自己卑下に対して同じく自己卑下を返すという相互性に基づき、日本語における「協調的な自己卑下」(collaborative self-deprecation) を指摘している。また、「speakers often self-deprecate in order to be on the same interactional plane, to be in equilibrium with each other（発話者はよく、互いを相互作用上の同じレベルに置き、互いに均衡を保持するために自己卑下をする）（訳は引用者による）」と述べているが、具体的な論述はなされていない。それに、相手の自己卑下に対して同じく自己卑下を行って返答することは、互いを同じレベルに置き、バランスを保つために重要な方法であるが、それだけではない。というのは、話し手が自己卑下を使って自分自身を下げ、自分だけを高い位置に置かないという操作をすることは、相手とのバランスを調整する機能も持っているのではないかと思われるからである。

また、張 (2014) は、受容上のトラブルとしてフェイスバランスの不均衡に対する修復行動を考察している。本稿も同じ出発点を持つが、本稿の研究対象となる自己卑下発話のフェイスバランスにおける調整機能に着目して分析していきたい。

吉富 (2007) は「謙遜表現は相手との上下の位置関係を敏感に感じ取りその間柄を調節する役割がある」と指摘している。吉富 (2007) の指摘は、自己卑下発話が持つフェイスバランス調整機能を考察する本稿にとって示唆的ではあるが、具体的な論述はなされていない。

そこで、本稿では、実際の日本語会話に見られる自己卑下発話に着目し、フェイスバランスにおける自己卑下発話が持つ調整の機能を考察していきたい。なお、本稿での分析例は、主にコーパスや先行研究からの引用、及び筆者による収集例を使用する。

3．フェイスバランスという考え方

Goffman (1967) は社会的相互行為を考察するために、「面目 (face)」という概念を提出した。Brown & Levinson (1987、以下 B&L) は Goffman の「面目」の概念を受け継ぎ、ポライトネス理論を確立した。彼らはまず、人間には「フェイス (face)」という基本的な欲求があるとした上で、それを具体的に「自分の行動を他者から邪魔されたくないという欲求」としてのネガティブ・フェイスと「自分の欲求が少なくとも何人かの他者にとって好ましいものであってほしいという欲求」としてのポジティブ・フェイスに分けた。そして、それらのフェイスを脅かす可能性のある言語行為 (speech act) を「フェイス威嚇行為 (Face Threatening Acts：以下 FTA)」と呼び、この FTA に対する補償的行為、すなわち、この基本的欲求である二つのフェイスを脅かさないように配慮することが「ポライトネス」であると捉えている。確かに、ポ

ライトネスでは、ストラテジーを使って相手に対するFTAを避けたり、軽減したりすることはできるが、ポライトネス理論では説明ができないこともある。例えば、会話参加者のフェイスが一方的に著しく侵害されたり、あるいは一方的に高められたりして会話参加者の間でフェイスの偏りが生じてしまう場合に、どういう言語行動をとるかについてはポライトネスでは説明できない。つまり、ポライトネスは、フェイス侵害の前の段階で、どういうストラテジーをとってそのフェイス侵害の度合いを軽減するかについての理論であって、会話参加者のフェイスが一方的に侵害されたり、高められたりした後に、その状態がそのまま続いて自動的に回復しないため、この場合にどう対処するのかについてはほとんど述べていないのである[2]。

三牧（2008）は、談話全体のFTAのやりとりの推移を談話の展開とともに分析し、「FTAバランス探求行動」というダイナミックな相互行為が存在すること、具体的には「(1) 過度のFTAを犯したと認識すると相手からのFTAを誘導し、フェイスを侵害された側も相手からの誘導に応じてFTAを遂行する、(2) 過度のFTAを犯した側が、その後自らに対してFTAを遂行する、(3) 一方、相手から多めにFTAを受けたと認識すると自発的に相手に対してFTAを遂行する」など、参加者間の最終的なFTA量のバランスを保とうとする三つの行動があることを指摘した。三牧（2008）の指摘を別の面から捉えれば、会話参加者がお互いのFTAのバランスを保とうとする意図は、実際にはフェイスのバランスを維持しようとする要求と言えるのではないかと思われる。

また、三牧（2008）の考えとは逆に、次の（5）の例が示すように、過度のFTAが行われていなくても、会話参加者の間で何らかの不均衡が生じることがある。具体的には、一方的にAのポジティブ・フェイス欲求を満たすことで、会話参加者間でフェイスの偏りが生じてしまい、フェイスバランスが不均衡になってしまう可能性が出てくる場合である。

(5)[3]女子高校生・友人間会話
1A：こないださあ

---

[2] B & L（1987）も「均衡の原則（balance principle）」（訳は田中訳（2011）による）について簡単に触れているが、詳しい論述はなされていない。

[3] 大塚（2013）はこの例を用いて「自己イメージのフェイス」と「対人距離のフェイス」について分析している。なお、文字化の規則について、大塚（2013：74–75）は次のように示している（一部だけ引用）。
／／：／／の後の発話が次の番号の発話と同時に発せられたことを示す。
(0.5)：(　) の中の数字は0.1秒刻みで表示される、話の中で起こる沈黙の長さを示す。(0.5) は0.5秒の沈黙であることを示す。
？：疑問符ではなく、上昇イントネーションを示す。
＝：間がなくすぐ起こった発話であることを示す。

2B：＝おん
3A：○○（A の恋人の名前）がさあ
4B：おん
5A：なんか、ネックレスくれた
6B：えーいいやん、なんでなんで、なん、誕生日プレゼント？
7A：そおーー／／―
8B：えーーいいやんいいやんー、えどんなんどんなん？
9A：なんかー
10 （1.0）
11A：いや、ティファニー、や／／ねん、けどー
12B：えーーーめーっちゃいいやんー、めちゃ高いんちゃ／／うん
（大塚 2013：68 からの引用）

Bayraktaroğlu（1991）はより広くフェイスワークのメカニズムを説明するために、Goffman（1972）の「相互作用上の不均衡（interactional imbalance）」という概念を借用し、そのフェイスワークの必要な概念として、FTA に加えて、FTA とは逆の性質を持つ FBA（face-boosting acts）、すなわち、聞き手及び／または話し手のフェイス欲求を満たす行為という新たな概念を提案した。そして、ある言語行為が、話し手あるいは聞き手のどちらか一方に対する FBA/FTA のいずれかにあたると、話し手あるいは聞き手のフェイスの価値が高まったり低まったりして不均衡を生み出すため、この不均衡な状況を「理想的なバランス（ideal balance）」へと回復するために修正的な行為が必要となると説明している。(5) の例は、A に対する一方的な FBA になるので、相互作用上の不均衡になってしまう可能性が出てくる場合であると言える。

Bayraktaroğlu（1991）が指摘したように、フェイス侵害行為もフェイス要求を満たす行為も、会話参加者間のフェイスバランスを不均衡にする恐れがあると言えよう。一方で、自分自身に対する FTA ともなる本稿の研究対象である自己卑下発話は、その「相互作用上の不均衡」を起こしたり調整したりする機能を持っているのではないかと思われる。

また、宇佐美（2017：137）は、「ディスコース・ポライトネス理論（DP 理論）」を提出し、ポライトネスは、「フェイス侵害行為の FT 度軽減行為としてだけでなく、「フェイス充足行為（Face Satisfying Act：FSA[4]）」も加えて、よりマクロな視点からも捉える必要がある」と述べている。また、フェイス均衡原理（Face Balance Principles）にも言及し、それには、「①「自身のフェイス侵害行為を、フェイス侵害度軽減行為で埋め合わせて、バランスを保つ」という側面、②互いの話者が、褒めあう

[4] 言い方は異なるが、フェイス要求を満たす／充足する行為として、Bayraktaroğlu（1991）の言う「FBA」と宇佐美（2017）の言う「FSA」は、意味はほぼ同じであると言えよう。

というように、「フェイス充足度」を高め合うという側面、③お互いに「フェイスを侵害しあう」ことでバランスを保つ」、という3通りがあるということを述べているが、それ以上の考察はなされていない。本稿は、フェイスの均衡の調整・保持の手段には、宇佐美（2017）が指摘したその三つ以外に、自己卑下発話もあるのではないかと考える。

Bayraktaroğlu（1991）、三牧（2008）及び宇佐美（2017）の考えに基づき、本稿は、会話参加者の間に「フェイスバランス」が潜在的に存在していると想定する。また、そのフェイスバランスは常に変動するものであって、会話参加者がそれまでの会話の流れを踏まえながら、参加者間のフェイスバランスの状況について認識・判断をした上で何らかの手段で調整を行うという立場をとる。そして、本稿では、本稿の研究対象である「自己卑下発話」はそのフェイスバランスを調整する一つのストラテジーとして機能することができると主張する。

そこで、次節では、フェイスバランスにおける自己卑下発話が持つ調整機能を考察していきたい。

4．フェイスバランスの調整機能について

本稿では、発話における話し手か聞き手のどちらか一方のフェイス状態に着目するのではなく、会話全体における会話参加者間のフェイスバランスをダイナミックに捉えたい。この節では、フェイスバランスにおける自己卑下発話の調整機能を考察していく。

4.1　褒めに対する自己卑下

ここでは、自己卑下の典型的なパターンともなる相手の「褒め」行為に対する「自己卑下」について見てみたい。フェイスバランスの視点から見ると、褒め行為は褒められた側のフェイスを上げることになるが、その上げられたフェイスを下げるために、その返答として自己卑下が使用される場合である。すなわち、相手によって上げられた分を自分で下げるパターンである。次の（6）の例で示すように、相手の褒めに対して、褒められた側はその褒めを否定し、自己卑下で応答することがしばしばある。

（6）[5][インタビュー84　林真理子×宮部みゆき『週刊朝日』]
01 林：今、ミステリーが売れて、恋愛小説は売れなくて、ミステリー系の女性作家が百花繚乱という感じですけど、その中でも宮部さん、群を抜いて、

[5] 趙・賈（2012）は、この例では、02宮部の発話では修復の遅延が見られると指摘している。確かに、実際に修復が実行されるのは後ろの部分においてであるが、本稿では、フェイスバランスにおける調整の視点から見れば、話し手が「わわわ」と言い始めた時点で、もうすでに調整が開始されているのではないかと考えている。

「女王」の座を占めてますね。
02 宮部：わわわ！　私けっこう、時代小説を書いたり、SF も好きですし、あっちふらふらこっちふらふらしてるんです。「女王」という落ち着きは、全然ないです。

（趙・賈 2012：92 からの引用：下線引用者）

（6）では、相手の褒め（「宮部さん、群を抜いて、「女王」の座を占めてますね」）に対して、話し手の宮部はまず「わわわ」と言って、その褒めは自分に対して過剰だという気持ちを表している。そして、自分の状況について「あっちふらふらこっちふらふらしている」と卑下してから、「「女王」という落ち着きは、全然ないです。」と相手の褒めを否定して卑下している。つまり、自分の上げられたフェイスを下げて相手とのフェイス状態の差があまり大きくならないようにしているのである。

また、前節で扱った（5）の会話の続きは次のようになっている。

（7＝5 の続き）前略
11A：いや、ティファニー、や／／ねん、けどー
12B：えーーーめーっちゃいいやんー、めちゃ高いんちゃ／／うん
13A：高ない高ない[6]、一番安いやつ／／やってー
14B：えーーーいいなーー

（大塚 2013：68 からの引用：下線引用者）

この例について、大塚（2013：69）は「A は自己イメージとして自慢話の内容を表明したいという欲求を持っている一方で、間やフィラーなどを用いて「進んで自慢しているわけではない」ということを表明したり、12 の B の賞賛に対して 13 で「高くない」「一番安いもの」と付け加えたりして B のフェイスへの補償を行っているといえる」と分析しているが、本稿では、例（7）の 13A の発話までは、会話の流れが一方的に A のポジティブ・フェイスを満たすものになっているため、フェイスバランスの偏りが生じているのではないかと考えられる。つまり、その偏りをバランスが取れた状態に回復するために、13A では自分の物に対して否定的な評価（「高くない高くない、一番安いやつ」）をし、自分のフェイスが相手よりも高くなりすぎないように自己卑下発話で下げているのである。

ただ、実際には、相手が好意を持って褒めてくれたことに対して、ただひたすらそれを拒否し、自己卑下してしまえば対人関係上好ましくないであろう。よって、次の（8）のように、相手（A）の褒めに対して、話し手 B が自己卑下した後に、相手を褒め返すような場合も見られる。この例ではさらに、その褒め返しを受けた A も同じく「私なんか、子供すぎて」と自己卑下して褒めを拒否している。つまり、02B と 03A の

[6]「高くない高くない」の近畿方言形。

発話は相手の褒めに対する自己卑下となるのである。談話の流れから見れば、話し手が自己卑下した後に取った「褒め返し」は相手の褒めてくれた好意に応えることもできており、会話をスムーズに進めることができていると言えよう。また、ここで褒めと自己卑下を相互に誘発し合っているのは、会話参加者の間のフェイスバランスを保とうとする要求によるものと言えよう。このようなフェイスの上がり下がりで会話参加者の間のフェイスバランスが維持されたのである。

(8)[7]〈BTSJ 初対面雑談 27〉
01A：若いですね、でも。
02B：え、若くないです〈2 人笑い〉。え、若いです〈笑いながら〉=。=そっちのほうが、若いじゃないですか〈笑いながら〉。
03A：私なんか、子供すぎて、なんか、ほんとよく、下のほうに見られるんですけど、たまに行き過ぎると中学生とか…〈笑いながら〉。

以上の例からでも分かるように、相手の褒めに対して、一方的に自己卑下して拒否するだけでは会話がうまく進まないこともあるため、自己卑下して褒めを拒否した後にも、相手のことを褒め返したりすることで、コミュニケーションを円滑に進めることができる。

加藤（2004）は「自己評価を含む発言をするときは《分をわきまえる》のが日本語の社会では重要で、能力に関する評価は本人以外が行うという言語行動上の決まりがある（加藤 2004：107）」と述べ、それを一種の文化的なコードであると指摘し、「謙抑」と呼んでいる。つまり、自分自身の能力などに言及する際には、「謙抑」の制約があり、それを無視して違反すると、相手を不快にさせたり人間関係を傷つけたりしてしまう恐れがある。ここで、このような、相手の褒めに対して話し手が自己卑下で返答することも、加藤（2004）の指摘した「謙抑」の制約に従うものだと言えよう。

4.2 聞き手の下げられたフェイスに対して

前節では、話し手自身の上げられたフェイスを下げて、聞き手とのフェイスバランスを維持する例を見てきたが、ここでは、先行文脈で聞き手のフェイスが下げられた場合、話し手が聞き手とのフェイスバランスを保つために行う自己卑下を考察する。つまり、聞き手のフェイスが下げられたことに対して、自分だけが高い位置に立たないで、自身のフェイスを下げる操作を通して、相手と同じレベルでいることを保証するのである。ここでは、聞き手自身が自分のフェイスを下げる場合と話し手が聞き手に対して FTA を犯して下げる場合を分けて考察していきたい。

---

[7] 張（2014）も、宇佐美のコーパス（宇佐美 2007 年版）からこの例を抽出して分析している。フェイスバランスという出発点は同じであるが、本稿は自己卑下発話だけに着目して分析している。また、例（10）と（12）も同様である。

まず、次の例を見てみよう。

(9)【結婚する双方の両家顔合わせの場面】
A：何の取り柄もない娘ですが、どうぞよろしくお願いします。
B：いえいえ、こちらこそ。わがままな息子で、どうぞよろしくお願いします。

(9) の例が示すように、相手 A の自分の娘に対する卑下に対して、B はまず「いえいえ」と否定している。しかし、ここでは、ただ否定するだけではまだ不十分であることが分かる。それは、相手のフェイスがまだその自己卑下によって下げられたままであるからである。そこで、会話参加者間のフェイスバランスの不均衡を調整するために、その続きとして、聞き手は自分の息子のことを卑下している。

次に、相手の自己卑下に対して、自分自身もそういう経験があると同じく自己卑下で返答する場合もある。次の例を見られたい。

(10)〈BTSJ 初対面雑談 26〉
01A：専攻は、中国語で,,
02B：はい。
03A：何をやってらっしゃるんですか？。
04B：一応、文法なんですけど,,
05A：文法。
06B：まだ、基礎から、もう一度っていう感じで〈笑いながら〉,,
07A：ふーん。〈私は〉 ┤〈┤ 【【。
08B：】】〈全然〉 ┤〉┤、研究のレベルにたどり着いてないんですけど…〈笑いながら〉。
09A：やー。私は、文法、んー苦手、というか,,
10B：〈ええ〉 ┤〈┤
11A：〈ちゃんと〉 ┤〉┤ やってきてなかったのでー。

この例では、相手（B）がまず 06B で自己卑下を開始している。その自己卑下の使用で、相手のフェイスが下げられている。ここで、相手とのフェイスバランスを保つには、A が相手のフェイスを上げてあげるか、あるいは自分のフェイスを下げるかという二つの方策が考えられるが、相手のフェイスを上げるために褒めるには、相手に関してあらかじめそれ相応の情報量を持っていなければならない。この例の話し手と聞き手は初対面であるため、それまでの形式文脈[8] から得られた情報以外にはお互い

[8] 加藤（2009）は「形式文脈」を「同一セッションの内部で言語的に具体化される発話の連続的な蓄積からなる」と定義している。詳しくは加藤（2009）を参照された

に対する情報をあまり持っていないと考えられる。ここで話し手は、その相手の自己卑下を受けてから自分自身について卑下を行っている。これはまさに、自分のフェイスを引き下げることで、相手と同じレベルに立つ操作であると言えよう。

今田（2015）は、「共-成員性」という概念を提出している。すなわち、会話参加者が何らかの「共通経験の語り合い」を始め、その経験を分ち合い、「私たちは同じ仲間である」という意味で同じグループ内にあることを示すことで、対人関係をよりよくするということである。(10) のように、相手の自己卑下に対して、自分も同じく自己卑下で反応することもそれにあたる。

以上の分析からも分かるように、同じように話し手の自己卑下に対して自己卑下で反応することであっても、種類が異なっていると考えられる。すなわち、相手の自己卑下を否定してから自ら自己卑下を開始する場合と、相手の自己卑下したことを受け、自分にも似たような側面があるというふうに自己卑下をして共感を表明する場合がある。前者は相手を高めるために自分を下げる操作となるのに対して、後者は自分のことを話し手と同じ位置に引き下げる操作となるのである。

以上の例は、聞き手の自己卑下によって聞き手自身のフェイスが下げられ、会話参加者間のフェイス状態が不均衡になったのに対して、話し手が自己卑下発話で調整するものである。次に、話し手自身が聞き手に対して犯したFTAによって下げられた聞き手のフェイスに対する調整の例を見てみよう。

(11)[9]［会話例6］J4の性格

01J3：いや、T（J4のあだ名）は女性の前でだまっちゃうかな：だって、結構.
02J4：だまっちゃうよ：hhh
03J3：° XXとか：°
04J4：え、そんなことあったっけ？
05J3：いや、だからこの前のあれもそうじゃないですか、Mネエ（共通の知人）も.
06J4：あ：：あれはね、初対面の女の人は苦手なんです.
07J3：ま、俺も苦手、[俺も苦手ですよ：
08J4：[すごい苦手. うん
09J3：俺シャイやもん.

い。

[9] 文字化データの記号について、林（2010：108-109）は次のように示している（一部だけ引用）。

J： 日本語母語話者
[複数の参加者の発する音声が重なり初めている時点では、角括弧（[）で示される
h 呼気音はhで示される。笑いを表すものにも用いられる
° ° 音が小さいことは、該当箇所が° で囲まれることにより示される。

（林 2010：104 からの引用：下線引用者）

（11）では、01 と 05 の J3 の発話は相手 J4 に対する否定的な評価となるため、J4 のフェイスが侵害されたと考えられる。これに対して、J4 が 06 で自分が初対面の女の人は苦手だと卑下して認めると、J3 は 07 と 09 の発話で「俺も苦手」、「俺シャイやもん」と卑下している。林（2010）は、ここでは、話し手が「取り上げた否定的な側面に対して、自分もそうであることに言及する」ことで、相手に対して犯した FTA の補償を行い、「相手との共感や共通点を持つことを示している」と述べている。確かに、ここでの話し手の自己卑下は相手に対する FTA の補償行為となるが、フェイスバランスの視点から見れば、聞き手の下げられたフェイスに対して話し手が自己卑下を開始することは、相手とのフェイスバランスを不均衡の状態からバランスの取れた状態に引き戻す手段ともなるのではないかと考えられる。

次に、これよりやや複雑となる（12）の例を見てみたい。

（12）〈BTSJ 初対面雑談 20〉【A と B は初対面で、B は A に英会話を教えてもらうように頼んだ後、しばらく経ってから再確認を行っている。】

01B：え、でもほんとにいいですかー？。

02A：や、別にいいですよ。あんまり為にならないと思いますけど。

03B：いや、ってか、（〈笑い〉）ほんとになんか、しゃ、しゃべ、んーと、なんか、あ、相手がいるだけでいいん〈ですよ〉 ⌈⌈。

04A：〈んー〉 ⌋⌋。

05B：でも、あたしの英語ってほんとにだめなん〈ですよ〉 ⌈⌈。

06A：〈えー〉 ⌋⌋ そんなことないですよー。「大学名」大受かるくらいだもん〈笑い〉。

07B：や、〈笑い〉それない。何で受かったのか不思議なくらいだもん（うーん）、ほんとに。

この例では、02A、05B 及び 07B にそれぞれ自己卑下発話が使われている。この例では、A は初対面の B の依頼を受け、協力することを引き受けているが、そのこと自体が B に利益を提供する行為である。

滝浦（2001：59）は「誰かに物をあげたいとき、そのことを伝える表現の選択にしばしば人が迷うのは、相手が目上であれ目下であれ、物をもらった側が“借り・負い目”を感じてしまう可能性がつねにあるからであり、通常与え手＝話し手は、相手になるべくそれを感じさせない表現を選ぼうとする。そして、話し手のそうした能動性は、「ストラテジー」（strategy：言語的方略）として記述することができる」と述べている。

滝浦（2001）の考えによれば、贈り物をするときなどに使われる自己卑下（例えば、「つまらないものですが」）は、なるべく相手の利益を最小化することで、相手にその「借り・負い目」を感じさせないとともに、相手に対して遠慮なく受けとってもらえる

配慮を表すこともできるので、一種のストラテジーとも言えよう。ここで、滝浦(2001)の考えに沿ってさらに敷衍してみると、誰かに物をあげる（物を提供する）場合だけではなく、何らかの行為（例えば、協力、相談、手助けなど）を提供するときも、相手が同じく「借り・負い目」や恩恵を感じてしまい、負担に思う可能性がある。このような場合、話し手は自己卑下をして、自分を高い位置におかないことで、相手に対する心理的負担を軽減し、恩恵を感じさせないようにする。

（12）の例では、その利益を最小化することで相手にかける心理的負担を軽減し、相手に恩恵を感じさせないようにするため、話し手は02Aで「自分の協力がためにならないかもしれない」と自己卑下をしたのである。それに対して、03Bはまず「いや」と否定しているが、03Bのそれ以降の発話（「相手がいるだけでいいんですよ」）は、少なくとも2種類の推意が考えられる。一つは、「相手がいるだけでいいですよ」、「本当にいてくれるだけでありがたいですよ」という意味で相手に対して感謝の意を表すことで相手の下げられたフェイスを持ち上げようとする配慮は読み取れるが、「別にためにならなくてもいいから」、「相手がいるだけでいいですよ」という意味にも解釈されうるため、聞き手の自己卑下発話をそのまま受けてしまうことになるので、相手に対するFTAとなってしまう、というものである。

そして、もう一つは、「そんなに大変なことではありませんよ」「ちょっと協力してくれればいいですよ」という相手に対して特に負担の大きい要求をしていないという配慮が表せる一方で、相手に対して「ただしゃべれるだけでいい」という「あまり相手の能力を重視していない」という意味合いも出てきてしまうので、相手に対するFTAとなってしまう、というものである。

つまり、ここで02Aの自己卑下に対する調整（03B）は失敗したと言えよう。故に、自己卑下となる02Aと相手に対するFTAとなってしまう03Bの発話が重ねてAに対するFTAになるため、会話参加者のフェイスバランスがさらに不均衡になってしまう。そこで、その不均衡を再調整するために、05Bで話し手は自己卑下を使用したのである。それに対して、06AではBが「大学名」大に受かるくらいだから、英語がだめなわけがないと事実に言及しつつ、その自己卑下を否定し、Bを褒めている。さらに、07Bは相手の褒めに対してまた自己卑下をしている。つまり、ここで、05Bと07Bの話し手による自己卑下の発話は、会話参加者間のフェイスバランスを調整する役割を持っているのである。

4.3　まとめ

この節では、フェイスバランスという視点から、自己卑下発話が持つフェイスバランス調整の機能について考察した。以上で論述してきたように、聞き手とのフェイス状態の差があまり大きくならないように両者間のフェイスバランスを維持するためには、自分の上げられたフェイスと相手の下げられたフェイスに対して、話し手の自己卑下発話はフェイスバランス調整のストラテジーとして有効であると言えよう。

5．終わりに

Goffman（1967）は相互行為における「面目」の認識及びその維持・回復に根ざす儀礼（ritual）について研究したが、B&L（1987）がそれを受け継ぎ、ポライトネス理論を提出した。本稿では、会話のやりとりの展開に存在する儀礼には、ポライトネスの他に、会話参加者の間にはフェイスバランスも潜在的に存在しているということを指摘した。その上で、自分自身を低く評価する自己卑下発話は、自分自身を下げる操作を通して、会話参加者間のフェイスバランスに対する調整のストラテジーとして働くことを主張した。

しかしながら、本稿で扱う例が少なかったため、今後より多くの自然会話のデータを収集し、考察を深める必要がある。また、フェイスバランスの普遍性についても、今後さらに検証しなければならない。そして、(9)（10）（12）の例からも分かるように、自己卑下発話はフェイスバランス調整の手段として働くだけではなく、フェイスバランスを不均衡にすることも可能であるため、自己卑下発話に対するフェイスバランス調整の（自己卑下発話以外の）ストラテジーについても興味深い。これらのすべてを今後の課題としたい。

記号凡例[10]

, ,　　発話文の途中に相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするためにつけ、改行して相手の発話を入力する。

？　　疑問文につける。疑問の終助詞がついた質問形式になっていなくても、語尾を上げるなどして、疑問の機能を持つ発話には、その部分が文末（発話文末）なら「？。」をつける。倒置疑問の機能を持つものには、発話中に「？、」をつける。

＝　＝　　改行される発話と発話の間（ま）が、当該の会話の平均的な間（ま）の長さより相対的に短いか、まったくないことを示すためにつける。その場合、最初のラインの発話の終わりに「＝」をつけてから、句点「。」または英語式コンマ２つ「, ,」をつける。そして、続くラインの冒頭に「＝」をつける。

…　　文中、文末に関係なく、音声的に言いよどんだように聞こえるものにつける。

〈　〉⌇〈⌇　　同時発話されたものは、重なった部分双方を〈　〉でくくり、重ねられた発話に

〈　〉⌇〉⌇　　は、〈　〉の後に、⌇〈⌇ をつけ、そのラインの最後に句点「。」または英語式コンマ２つ「, ,」をつける。また重ねた方の発話には、〈　〉の後に、⌇〉⌇

[10] 宇佐美（2015）による（一部だけ引用）。

をつける。

【【　】】　第1話者の発話文が完結する前に、途中に挿入される形で、第2話者の発話が始まり、結果的に第1話者の発話が終了した場合は、「【【　】】」をつける。結果的に終了した第1話者の発話文の終わりには、句点「。」の前に【【をつけ、第2話者の発話文の冒頭には】】をつける。

（　）　短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に、（　）にくくって入れる。

（〈　〉）　相手の発話の途中に、相手の発話と重なって笑いが入っている場合は、短いあいづちと同様に扱って、（〈笑い〉）とする。

参考文献

今田恵美（2015）『対人関係構築プロセスの会話分析』大阪大学出版社.

林始恩（2010）「親和的関係における否定的評価―日・韓の話者の話し方とFTA補償行為に注目して―」『筑波応用言語学研究』17号、pp.99-109.

宇佐美まゆみ（2015）「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）2015年改訂版」

――――――（2017）「ディスコース・ポライトネス理論の新展開―「時間」「フェイス充足度」「フェイス均衡原理」という概念を中心に―」『汉日语言对比研究论丛』第8辑、pp.125-139.

大塚生子（2013）「ポライトネス理論におけるフェイスに関する一考察」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要. 外国語編』4(1)、pp.55-77.

加藤重広（2004）『日本語語用論のしくみ』研究社.

――――――（2009）「動的文脈論再考」『北海道大学文学研究科紀要』128号、pp.195-223.

滝浦真人（2001）「敬語の論理と授受の理論―「聞き手中心性」と「話し手中心性」を軸として」『月刊言語』30(5)、pp.54-61.

趙刚・賈琦（2012）「日语会话的修正机制研究」『日语学习与研究』159(2)、pp.86-94.

張玲玲（2014）「言語的修復行動に関する語用論的研究：中国語との比較を通して」北海道大学大学院文学研究科博士学位論文.

永野美菜（2017）「韓国語母語話者を含む日本語日常会話における褒めと自己卑下の連鎖―会話分析の視点から―」『神奈川大学大学院言語と文化論集』23、pp.1-95.

三牧陽子（2008）「会話参加者によるFTAバランス探求行動」『社会言語科学』第11巻第1号、pp.125-138.

吉富千恵（2007）「謙遜表現に対する多面的検討」『龍谷大學論集』469、pp.138-168.

Bayraktaroğlu, Arin（1991）Politeness and Interactional Imbalance. *International Journal of the Sociology of Language*. 92. pp. 5-34.

Brown, P. & S. C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.（田中典子監訳、斉藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子訳（2011）『ポライトネス―言語使用における、

ある普遍現象』研究社.）
Goffman, Erving (1967) *Interaction ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*. New York: Anchor Books.（浅野敏夫訳（2012）『儀礼としての相互行為―対面行動の社会学』〈新訳版〉（叢書・ウニベルシタス 198）法政大学出版局.）
――――――(1972) *Interactional Ritual*. London: Penguin.
Kim, Myung-Hee (2014) Why self-deprecating? Achieving 'oneness' in conversation. *Journal of Pragmatics*. 69. pp. 82–98.

コーパス
宇佐美まゆみ監修（2011）「BTSJ による日本語話し言葉コーパス（2011 年版）」『人間の相互作用研究のための多言語会話コーパスの構築とその語用論的分析方法の開発』平成 20–22 年度科学研究費補助金基盤研究 B（課題番号 20320072）研究成果

（ずい　ぎょうせい・北海道大学大学院博士課程）